

世界防災フォーラム前日祭－災害に学び、未来へつなぐー
2017年11月25日（土）東北大学百周年記念会館川内萩ホール
議事録（第一部）

○板橋恵子（総合司会）

ただいまから、世界防災フォーラム前日祭・サイエンスアゴラ連携企画「災害に学び、未来へつなぐ」を開幕させていただきます。私は、本日、総合司会を務めさせていただきます、板橋恵子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、今村文彦世界防災フォーラム実行委員会委員長より、開会のご挨拶を申し上げます。

○今村文彦・世界防災フォーラム実行委員会委員長（東北大学災害科学国際研究所所長）

皆さん、こんにちは。紹介をいただきました東北大学の今村でございます。世界防災フォーラム実行委員会委員長を務めさせていただきます。ただいまより、世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017前日祭「災害に学び、未来へつなぐ」を開催したいと思います。

2011年3月11日に発生しました東日本大震災。地震、津波、そして福島第一原発事故。日本、更には人類が経験したことの無い未曾有の災害でございました。

以来、国内外から、さまざまなご支援をいただき、東北被災地は復興に尽力してまいりました。復興途上の2015年3月、2年前でございますけれども、被災地・仙台で第3回国連防災世界会議が開催されました。そのとき出されたのが「仙台防災枠組」でございます。

会議の開催地・仙台を記念しまして、まさに「仙台」という言葉が今、英語になり、世界各地で防災に関して言われているときには、必ず出る名前になっております。この「仙台防災枠組」は、地元・仙台、東北だけではなく、仙台会議から世界全体の将来の防災の方向性を示す取り決めでございます。今後2030年、この「仙台防災枠組」が防災を推進していこうと、国際社会で、また皆さんで、合意していただいたわけであります。

我が国は、この国連防災会議をホストした国として、今後、東日本大震災の更なる復興、国内の防災対策を進めるだけではなく、ぜひ国際社会との連携を深めまして、「仙台防災枠組」の実施を強力に進めていきたいと考えております。

その一環として、スイスの防災ダボス会議と協力しまして、世界防災フォーラムを、2年に一度、開催することになりました。東北大学をはじめ、仙台市、宮城県、河北新報、東北経済連合会、仙台商工会議所、また、グローバル・リスク・フォーラム、この皆さんが、今回の世界防災フォーラムの実行委員会を作りまして、今、実施するわけでございます。

この東北・仙台から、国内の連携の方と防災の具体的な解決策を考え、それを、作り出していきたいと思っております。特に東日本大震災の経験を世界に発信すること。これを目指していきたいと思っております。

今回は、記念すべき第1回の世界防災フォーラムでございまして、本日はその前日祭になります。特に、本日は東京で毎年開催されております、科学と社会をつなぐ市民イベント、サイエンスアゴラと連携しております。

本日の前日祭第1部では、この6年半あまりを振り返りたいと思っております。また東北3県で特に

若い皆さんが、どのような防災取り組みを行っているのか。また今後、懸念されております南海トラフ。また過去には阪神・淡路大震災がありました。そこでの知見、また経験というのを交えて、改めて、今後の防災・減災というものを議論していきたいと思っております。休憩を挟みまして、第2部では国内外から寄せられました、支援への感謝を込めまして、地元の伝統芸能や復興を担う音楽のステージをお届けしたいと思っております。

最後になりましたが、第1回世界防災フォーラムの開催に、ご尽力をいただきました方々に深く感謝をし、また本日、本当にお忙しい中、集まってきた皆様方に、心より感謝を申し上げたいと思っております。東日本大震災の経験と教訓を未来につなげていきたい。この決意を新たにし、この前日祭を迎えたいと思います。ぜひ最後まで、ご参加をいただきたいと思っております。本日はどうぞ、よろしくお願いいたします。

○板橋総合司会 続きまして、主催者を代表して、ご挨拶を申し上げます。

はじめに世界防災フォーラム実行委員会会長、里見進東北大学総長より、ご挨拶を申し上げます。

○里見進 世界防災フォーラム実行委員会会長（東北大学総長）

東北大学総長の里見であります。世界防災フォーラム実行委員会の会長として、前日祭の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本日は、大変お忙しい中、本当に多数の皆様方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

振り返りますと、東日本大震災から早くも6年半が過ぎました。まだ、被災地および被災者の心の中には、大きな傷跡が残っていると考えております。改めまして、亡くなりました方々のご冥福をお祈りしますとともに、被害に遭われた方々に対しまして心からお見舞いを申し上げたいと思います。

東日本大震災につきましては、東北大学自身も大きな被害を受けましたが、国の内外を含む各方面からのご支援のおかげをもちまして、教育研究機能は震災前と同等のレベルまで回復することができました。この間のご支援に対しまして、心より御礼を申し上げます。

震災以来、東北大学は、被災地の中心にあった総合大学としての使命感とともに、東北の復興のみならず、社会の変革そのものを先導するための教育研究活動を行ってまいりました。

この世界防災フォーラムは、国際的な防災指針である「仙台防災枠組」の推進を目的としておりますと同時に、私が総長として掲げた目標「東北復興・日本新生の先導」の一環とも位置付けられるものです。今後、このフォーラムの定期的な開催によって、世界へ「BOSA I」という言葉を広めていき、被災地の更なる復興へと繋げていくことを願っております。

本日の前日祭は、被災地で防災活動に尽力する若い世代が主役であります。また、被災地を力づけ、復興にあたって大きな力となってきた地域芸能や音楽も披露されます。防災は文化というレベルまで昇華させなければ後世に伝えることはできません。東北は今、まだ復興の途上にありますが、本日は東北の元気な次世代と文化を通して、東北の底力を感じ取っていただけるような会になればと思っております。

また、明日からは、いよいよ本体会議が始まります。この機会に、ぜひ、それぞれの組織や立

場からの取り組み、成果にも触れられ、皆さんの意見やパワーもプラスして、更に有意義な会合にさせていただきたくお願い申し上げ、私の挨拶にいたします。本日は、多くの皆様方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

○板橋総合司会 続きまして、同じく主催者を代表して、世界防災フォーラム実行委員会顧問、郡和子仙台市長よりご挨拶を申し上げます。

○郡和子 世界防災フォーラム実行委員会顧問・仙台市長

仙台市長の郡和子でございます。世界防災フォーラムの前日祭の開催にあたりまして、ひと言ご挨拶を申し上げます。

本日は海外からの防災専門家の方々に加えて、幅広い世代の市民の皆様方、多くご来場いただきましたことに、改めて深く感謝を申し上げます。

仙台は古くから学びの都・学都と呼ばれてきましたが、現在では音楽の都・楽都とも呼ばれるようになって広く知られるようになりました。国際音楽コンクールや、市民が運営する定禅寺通りストリートジャズフェスティバルが開催され、また、合唱団やアマチュアオーケストラで活動する市民の方々も多く、私どもも、このような仙台の音楽文化を更に発展させ、音楽を通じた魅力ある街づくりを進めるために、さまざま取り組んできたところでございます。こうした取り組みは震災からの復興において、被災された方々の心の復興に大きな力を発揮いたしました。

震災直後は仙台の街から音が、音楽が一切消えてしまいました。そして、震災から2週間後。仙台フィルハーモニー管弦楽団と市民有志により、「音楽の力による復興センター」が設立され、これまで避難所や仮設住宅などを中心に650回を超える復興コンサートを開催し、多くの皆さんの共感を得てまいりました。

また震災後は音楽に関わるご縁で、仙台を支援してくださる動きが、たくさんございました。仙台ジュニアオーケストラにイタリアの国立弦楽器製作学校から楽器を寄贈いただいたほか、過去の仙台国際音楽コンクールに出場された方々が被災地を訪ねてくださり、学校などで子どもたちを励ます心温まる音楽を届けてくださったこともございました。

最近では、復興公営住宅などに整備が完了したことを踏まえまして、居住者同士の新たなコミュニティづくりをサポートするために、音楽の力を生かす取り組みも進めているところでございます。

震災後、文化・芸術が持つ影響力の大きさが再認識されていますけれども、文化・芸術の取り組みにより創成されたものは、長く継承される可能性を持って、世界へとつなぐ力になるのではないかと考えているところです。

今日は、被災地の若い世代による防災の取り組みの発表に加えまして、伝統芸能や音楽のステージが披露されると伺っております。文化・芸術の力が、更なる復興の推進力として、つながっていくことをご期待し、私からの挨拶とさせていただきます。今日は、ありがとうございます。

○板橋総合司会 続きまして、共催機関を代表して、国立研究開発法人科学技術振興機構理事・真先正人より、ご挨拶を申し上げます。

○真先正人理事

ただいまご紹介いただきました、科学技術振興機構・JSTの真先でございます。世界防災フォーラム前日祭を共催する立場として、ひと言、ご挨拶申し上げます。

本日は誠に多数のご来場をいただきまして、ありがとうございます。

私どもJSTでは、2011年の東日本大震災からの復興促進に向けて、産学協同による研究開発の支援に取り組んでまいったところでございます。また、今年度は熊本地震からの早期復興に向けた支援についても、また取り組みを開始したところでございます。

ちょうど、このホールを出たホワイエのところで、私どもの震災復興への取り組みでありますとか、防災に関する研究の展示を行ってございます。休憩時間など、ご利用いただきまして、ぜひ、ご覧いただければと思っております。

さて、2015年9月、国連総会で世界共通な持続的な開発目標、いわゆるSDGsと呼んでおりますが、これが採択されたのは、皆様ご存じでしょうか。このSDGsは、まさに世界一丸となって、地球の持続的な開発を可能としていく17の目標を定め、これに向けて世界一丸となって取り組むというものでございます。この世界共通の課題に取り組むためには、国はもとより大学等の研究機関、また企業のみならず、さまざまな関係する方々が連携していくことが必要でございますが、更に言えば、この宇宙船地球号というのは、この乗組員である我々自身が、この問題に自らの問題として考え、取り組んでいくことが重要かと思っております。

このような問題意識のもとで、私どもJSTでは、毎年秋のこの時期に、東京・お台場地域において、あらゆる人に開かれた科学と社会をつなぐ広場として、サイエンスアゴラを2006年より開催してございます。

我々が暮らしやすく、持続可能な社会づくりに向けて、解決すべき問題を見据えて、世代や立場、文化、学問分野、国籍などを越えて、未来の社会づくりにつなげるため、今年度はまさに壁を乗り越えて「越境する」ということをテーマに挙げて、対話、協働を行っていく場ということでございます。

今年度は、この取り組みの一環といたしまして、更にこの輪を広げていくという観点で、日本全国に対話・協働の場づくりを広げているところでございます。

今回、この世界防災フォーラムの開幕行事に位置づけられました、この前日祭におきまして、サイエンスアゴラの連携企画として位置づけさせていただいて、まさに協働・対話を深めていくということで考えているところでございます。

実は、今年のお台場でのサイエンスアゴラが、昨日開幕いたしました。昨日、私もその場に出席をいたしまして、開幕宣言をいたしました。

「さあ、みんなで越境しよう」ということを、号令をかけてきたところでございます。

この前日祭、第1部「青少年からのメッセージ」。この様子は、東京会場にも同時配信をし、防災の取り組みの発表、議論が東京でも共有されるというような仕掛けとしているところでございます。まさに、世代や立場のみならず、地域、それから会場を越えて、ご来場の皆さんと東京会場の皆さんが防災への意識を高め、防災を通して、これからの社会を考えるということで、この取り組みが更に全国に向けて発信をし、広がっていくことを大変期待し、切に願っているところでございます。

最後になりますが、今後も宇宙船地球号の舵取りを皆さんとともに考え、取り組んでいながら、最終的にはSDGsの達成に貢献できるよう、私どもJSTは引き続き汗をかいて取り組んでまいりますことを、ここにお約束をさせていただきまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○板橋総合司会 続きまして、海外から世界防災フォーラムにご参加いただいている方々を代表して、国連開発計画気候変動防災部長、ジョー・ショウヤー様よりご挨拶を頂戴いたします。ショウヤー様、よろしく願いいたします。

○ショウヤー国連開発計画気候変動防災部長

皆さん、こんにちは。私は何度か仙台に来ております。また帰って来られて、本当に嬉しく光栄に思います。一番最近は2015年でありまして、ここで、そのときに、ちょうど国連防災世界会議で「仙台防災枠組」を採択しました。

私は、UNDPの気候変動部長をしておりますが、私たちは150か国以上で、準備、予防、対応の仕事をしてます。災害の後の復興に関してもです。

インド洋で、2004年にありました津波にも関わり、ハイチの地震、ネパールの地震、フィリピンでの地震、最近では、私はカリブ海にまいりました。ハリケーンがカリブ海を襲い、島が被災したからです。

われわれはいつも防災に関わっていますが、世界中で、災害が非常に壊滅的な影響を与えています。悲しいことです。

良い点は、災害に対して対応しているということです。

対応という点で、日本ほど、全員がモデルになれる国は、ほかにないと思います。ですから、このように「仙台防災枠組」があり、その前には、「兵庫行動枠組」がありました。

ここで、どのようにして我々は備えができるか。今回の大震災から学んだことなどを、みんなに発信しようと協力してくださっています。

だからこそ、ここへ戻ってこられたこと、国際社会を代表して来られたことを、とても嬉しく思います。また、もうすぐ「防災4.0」というのがあるわけですけれども、こうしたことに關して包括的な枠組み、対応をしていきたいと思ひます。

今日、それから、ここ数日間、皆様とともに、いろいろと行動を起こしたいと思ひます。市長は文化や若者や、それから芸術などの重要性を言及されました。本当にそうですね。この災害というのは全て社会の全員を巻き込むものであります。そういう人たちを全員、巻き込んで対策を考えていくということ。

本当に皆さん、ありがとうございました。よい集まりにいたしましょう。

○板橋総合司会 ショウヤー様、ありがとうございました。

ここで、本日ご臨席を賜りましたご来賓の方をご紹介させていただきます。

衆議院議員の福井照様です。ありがとうございます。

本日は福井様をはじめ、国内外から多数の皆様へ、ご参加いただいております。

ご参加、誠にありがとうございます。

それでは、プログラムに移りたいと思います。

まずはじめに、今村委員長が、東日本大震災と、被災地のこの6年の変化を振り返ります。

今村先生、お願いいたします。

○**今村委員長** 私のほうからは「東日本大震災から6年 - 教訓を未来へ - 」ということで報告させていただきますと思います。東日本大震災から、6年8か月が経ちました。

東北は、まだ復興の途上でありますけれども、同時に、残念ながら災害記憶の風化も進んでおります。あのとき、何が起きたのか。そして被災地は、それをどのように乗り越えてきたのでしょうか。今から振り返っていききたいと思います。

今からお見せする内容の一部は、震災当時の映像や、また、画像が含まれます。万が一、ご気分や体調が崩れた場合は、すぐにスタッフにお声をかけていただきたいと思います。

今、見ていただいておりますのは震災前の岩手県の宮古市田老の様子でございます。震災前の本当に素晴らしい町の風景です。また、こちらは、東北大学の近くでございます宮城県での仙台平野、海沿いでの様子でございます。

沿岸部の緑は、ちょうど伊達政宗が慶長の地震・津波のあとに整備されたといわれている防潮林でございます。しかし、この風景は震災で一変をいたしました。

3月11日、2時46分。三陸沖において東北地方太平洋沖地震が発生いたしました。このマグニチュードは9ということで、国内最大であり、世界でも4番目の地震になります。大津波が発生し、特に東北、三陸地方には大きな被害をもたらし、津波の高さは20mを超えました。この津波によって多くの方が、犠牲になったわけでございます。

今から見ていただくのが、その津波の伝播の様子でございます。我々は当時のデータを使いまして、津波を再現しました。

被災地の様子です。この津波による犠牲者は、2万名以上になります。被害額は原発事故を含めないで約17兆円と推定されています。

この地震と津波によって、今見ていただいている福島第一原発発電所、大きな影響を受けました。発電所のメルトダウン、放射性物質の放出。深刻な事故が起きたわけでございます。現在も避難区域の設定などにより、8万名以上の方が避難生活を送られております。

こうした困難の中でも被災地は、さまざまな支援を受けながら、復旧・復興に尽力してまいりました。先ほど見ていただいた田老、また仙台の平野を例に、今までの歩みを紹介したいと思います。

今見ていただいているのは、宮古市田老の万里の長城と例えられている二重の防潮堤でございます。しかし当時、来襲した津波は10mを超え、この防潮堤を破壊し、田老の市街地を壊滅させました。

2年後の様子であります。

昨年6月、田老の中心部は今、野球場に変わっております。

今、野球大会が開催されまして、町中にも元気な声が響いております。

田老の中心部は今、防災集団移転事業によって、山林を切り開き、高台に移転しております。消防署、派出所、保健所、またさまざまな住宅も、この高台に移動しております。田老だけではなく、多くの被災地で災害公営住宅の建設、また、町の復興に向けて動いております。

東北大学も被災地域の中心にある総合大学としまして、震災を受けたそのあとに、さまざまな活動に取り組み、その中の1つが1年後、2012年4月に発足しました、災害科学国際研究所でございます。東日本大震災の教訓を未来へつなぐこと。これが、研究所のミッションでございます。

さまざまな分野の専門家が集まり、今、見ていただくように、ほかの地域での現場の調査。また、真ん中には、過去400年の津波のハザード評価。また、地震空白域で将来起こる可能性のある津波等も解析しております。震災当時、何が起きたのかを科学的に検証したいと考えています。震災で得たデータベースであります「みちのく震録伝」を構築しまして、災害について記録をし、今後の防災に生かす活動も始めております。先ほど見ていただいた津波のコンピューターグラフィックスも、その研究の一部でございます。研究と社会をつなぐため、地域の方々と一緒に行う避難訓練や、また、防災出前授業などの実施も、さまざまな地域で活動を行っております。

次に仙台の荒浜での、この6年の復興の状況を見ていただきたいと思います。震災当時は今見ていただいているとおりに、荒浜には高さ10mを超える津波が押し寄せました。平野部の津波としては世界最大級の高さになります。残念ながら、荒浜では数百名を超える方々が亡くなり、市街地では壊滅的な被害、また、海水をかぶった水田は、耕作の中止を余儀なくされたわけでありませう。

今、この努力によって水田から、がれきを取り去り、また、塩もなくなり、田植えが再開された状況でございます。

最後にお見せいたします、この写真は、今年9月の様子であります。宮城県気仙沼、岩手県陸前高田、また、宮古市田老、この様子であります。

被災地が日常を取り戻すさまざまな努力を続けた一方で、震災により身近な人たちを失い、仕事や住み家を変えざるを得なかった人々については、いまだ癒えない傷が残っていると思います。被災地には、さまざまな課題が残されていますが、同時に、特に被災地の外では、震災の記憶が薄れつつある現状があります。その中で、我々がすべきことは、この災害は、過去のものではなく、将来もまた起きるという事実に向き合い、この東日本大震災の経験を記憶し続けることだと考えています。東北だけではなく、ほかの地域の人々と協力し、ともに未来へつないでいくことが非常に大切です。

このあと、震災で最も大きな被害を受けた岩手、宮城、福島県の若い世代の皆さんに、震災の経験を未来へ生かす活動を発表していただきます。阪神・淡路大震災や南海トラフ巨大地震・津波に備える高知県の取り組みも紹介いただきます。ぜひ皆様と一緒に、この震災を、また、得られた教訓をどのようにつないでいくのか、考えていきたいと思っております。ご清聴、ありがとうございました。

○板橋総合司会 今村先生、ありがとうございました。震災から、この6年を振り返っていただきました。

では今のお話にもありましたが、ここからは、東日本大震災の経験を将来に生かすため、被災地で懸命に防災活動を行っている若い世代の皆さんの取り組みをご紹介します。

また本日は、阪神・淡路大震災を経験した大阪や、南海トラフ巨大地震に備える高知からも、ご参加いただいております。

それでは発表者の皆様、そして発表後のディスカッションでコメンテーターを務めていただきますお二方、どうぞステージにお入りください。皆様、どうぞ拍手でお迎えください。

それでは発表順に、ご紹介をさせていただきます。

まずは、岩手県立大槌高校復興研究会。

倉澤杏奈さん、黒澤亜美さん、そして、前川拓也さん。よろしくお願いします。

続いては、岩手県立大学災害支援ボランティア団体代表の川原直也さんです。

宮城県女川1000年後のいのちを守る会の鈴木元哉さんと、渡邊滉大さんです。

福島県立福島高校スーパーサイエンス部放射線班、見城花菜子さんと菅野翼さんです。よろしくお願いします。

阪神・淡路大震災を経験した大阪からも、お越しいただいておりますが、発表者としては大阪市立大学都市防災教育研究センターの吉田大介先生です。よろしくお願いいたします。

コメンテーターを務めていただくお二方、大阪市立大学都市防災教育研究センター所長の森一彦先生です。よろしくお願いいたします。

東北大学災害科学国際研究所教授の佐藤健先生です。よろしくお願いいたします。

それでは早速、発表に移っていただくことにしましょう。

まずは、岩手県立大槌高校復興研究会の皆さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

○黒澤杏奈さん はじめまして。岩手県立大槌高等学校3年の黒澤亜美です。

○倉澤亜美さん 同じく倉澤杏奈です。

○前川拓也さん 同じく前川拓也です。

○倉澤さん これから大槌高校復興研究会について発表いたします。よろしくお願いします。

まずはじめに、私たちが住む大槌町の位置をお伝えします。

大槌町は岩手県の沿岸部に位置し、東西に細長い町です。そのため町内には、海に面している地域もあれば、標高の高い山に囲まれた地域もあります。海岸線はリアス式海岸で風光明媚な町です。

○黒澤さん 東日本大震災のあった、2011年3月11日。大槌町は、津波で住民の約9%の方が亡くなりました。また、約70%の建物が被害に遭いました。

地震発生直後から、避難者が続々と高台にある大槌高校に集まりました。

学校は避難所となり、被災から約1か月間、当時の生徒と先生方で避難所運営を行いました。

○倉澤さん 震災を経験した私たち大槌高校生が、復興のためにできることは何か。

それは、当時の先輩方の活動を引き継ぎ、そして発展させ、地域の方々とともに、大槌町の未来を考えることだと思い、復興の活動を始めました。

震災から2年後、この活動の名称を生徒から募集し、大槌高校復興研究会と決め、生徒自身の活動を、できることから無理なく進めていくことにしました。

復興研究会には、6つの活動があります。本日は、その中で定点観測班について紹介します。定点観測とは大槌町内約180地点の同じ場所、同じ角度から年3回、写真を撮る活動です。

2013年4月から神戸大学大学院近藤民代研究室の指導を受け、大学院生とともに活動を続け、今年9月で14回になります。撮影した写真は2500枚以上。

震災前の写真と対比させながら復興の進捗状況を知ることができます。

写真は、本校のホームページから見ることができます。この映像は今年5月の活動の様子です。

○黒澤さん この写真は震災前からの大槌を定点観測した写真です。

2014年12月に、道路のアスファルトをはぎ、2015年に盛り土をしました。

工事は進み、この道路は2016年夏に開通しました。これが、現在の様子です。

私は、この場所の写真が大好きです。

約2mの盛り土の上に初めて立ったとき、まだ道路もなく、全く何もありませんでした。

きれいに整地された盛り土の上に立ち、4年間待ちに待った復興がここから、やっと始まるというワクワクした気持ちになりました。

毎年、学校の文化祭で定点観測写真展を開催し、町民の方々にも町の変化を紹介しています。

今年10月の文化祭でも、震災前の写真を見て、当時を懐かしむ方々に、盛り土や区画整理の過程などを説明し、とても喜んでいただきました。

○倉澤さん 私たちが定点観測に参加し、学んだことは、継承することの大切さです。

津波で甚大な被害を受けました。更地になった町の復興には時間がかかっています。

私たちの先輩も、変化のない写真を2年、撮り続けました。震災の悲惨な被害の状況と、そこからの復興の過程を記録し、継承することの大切さをこの活動を通し学びました。

また、新しい町をつくるために、たくさんの方が遠いところから集まり、知恵と力を貸してくださっています。困ったときは人と協力することが大切だということも学びました。

復興が進み、景色が変わっても、震災前の町の風景と思い出を、これからも大切に共有していきたいです。

○黒澤さん 次の定点観測は12月にあります。

私たちにとって、高校生活最後の定点観測になります。

定点観測を重ねるたびに復興の兆しを感じています。少しずつ自宅再建が進み、町並みに変化が見られる場所。その反面、区画整理まで時間がかかりそうな場所。同じ町でも場所によって進具合に差があります。しかし、私たちは、この町が大好きです。

○倉澤さん 復興ってなんだろう。津波があつて、町が流されて、仮設住宅で住むようになり、そして少しずつ町が再生されていく。そんな中、復興の意味を考えるとときがあります。

6年経ったけれど、まだ6年しか経っていない。

でも、私たちは、たくさんの活動から夢と希望を感じることができます。

これからも、大槌高校の復興研究会での活動を大切にしていきたいです。

本日は、ご清聴ありがとうございました。

○板橋総合司会 岩手県立大槌高校復興研究会の皆さんでした。ありがとうございました。

では、続きまして、岩手県立大学災害支援ボランティア団体代表の川原直也さん、お願いいたします。

○川原直也さん はい、岩手県立大学の川原直也といたします。

僕からは、延べ1万6000人以上の大学生の思いや力を、どのように被災地に届けたかという話をお話したいと思います。

震災直後、全国では東北のため、そして岩手のためと思う大学生がたくさんいたのですが、ただ、実際にボランティアをしたいと思っても、県庁所在地、盛岡市から沿岸に行くまで片道100kmあるというような移動の問題、そして実際にいても、どこに滞在すればいいのかという滞在拠点の問題、そして実際に行っても、どういうふうな活動をすればいいのかという現地との調整というふうな課題がたくさんありました。課題がたくさんあり、実際に行きたくても行けないという学生が、たくさんいました。

そこで、住田町という沿岸部と隣接している内陸部の町の公民館をお借りして、滞在拠点を作りました。これが、いわてGINGA-NETプロジェクトというものです。いわてGINGA-NETプロジェクトでは、大学だったり、社会福祉協議会、もしくは大学のサークルだったり団体などのさまざまな窓口から申し込みがあり、そして、岩手県では、いわてGINGA-NETのスタッフ、もしくは岩手県に在学している大学生が、全国から来た学生の生活面であったり、活動面のサポートを行います。そして、実際に現地に行き、現地とのマッチングも行っています。

当初は、お茶っこサロンというような地域コミュニティーに寄り添うような活動が多くありました。そして、釜石市というところには、仙人峠というところがあるんですけど、2011年のときには仙人峠に1000人の大学生を連れて来ようというスローガンのもとで行い、実際に1000人も大学生が岩手に来ていただきました。

ちょっと文字は小さいんですけど、これまで約209校の大学が参加し、延べ1万6000人以上の大学生が岩手に来てボランティア活動を行ってきました。

実際に、ここで、いわてGINGA-NETプロジェクトの1期間の流れを説明したいと思い

ます。

1日目に、まず、オリエンテーションを行い、2日目、3日目にフィールドワーク、実際に今、岩手の現状はどういうものなのかというのを知るフィールドワークを行います。

そして、中日に、それぞれボランティア活動を行い、最後、大学生内で振り返りを行い、解散というような流れとなっております。

これは、オリエンテーションというものなんですけど、オリエンテーションでは、たくさん集まった大学生が、それぞれグループに分かれて、どこの活動先に行くかというような、活動先を決めたり、1日の活動を通して、どのようなことを感じたかというような振り返りを行う時間です。ここで、それぞれチームの中での合意形成だったり、チームビルディング、そして、さまざまな多様な価値観に触れるような時間となっております。

フィールドワークでは実際に、一度も岩手に来たことがない大学生もいらっしゃいますので、そこで、地域の方から被災前の現状、そして実際に災害があった今、そして今後、どのような未来に進んでいくかというような流れで、その地域を知っていくフィールドワークを行っていきます。また、活動では、このように漁師さんとの交流も行います。

このような漁師さんの交流で大きな被害に遭われても、そこで生業として生活していく海との関わり方を大学生は学んでいきました。

また、沿岸部での活動だけではなく、滞在拠点として支えていただいている住田町の方々との交流も行っております。このようにお祭りで山車を引いたり、食事会など地域の方との交流会も大切に行っております。

今まで2011年から現在まで、このプロジェクトを行ってきたのですが、私たちが変わらずに伝え続けてきたメッセージとして、東日本大震災で被災した地域と、そこに生きる人たちのことを忘れずに継続に支援してほしい。そして、岩手で活動して、ただそこで終わりというわけではなく、岩手での経験を持ち帰り、そして、自分が生活する地元、もしくは大学で、身近な地域で何ができるのかというのを考えて、備えてほしいというものを変わらずに伝え続けてきました。

そこで、岩手での経験を持ち帰り、実際に自分たちの地域で、どのようなことができるのかというものが、ごく一部ではありますが、このように全国各地で展開されてきております。

そして、東日本大震災以降も全国では、さまざまな災害が起きております。

そこで、大学生の中では、学生ネットワークを構築して、被災地支援、災害支援を行っております。その一例なんですけど、2015年に関東・東北豪雨というものがありまして、そこでは、宇都宮大学、広島大学、岩手県立大学の3つの、3大学のボランティアチームを結成して、被災地支援を行いました。これの経緯としては、2014年にコミュニティ支援力養成研修会という学生対象の研修会を行っており、その宇都宮大学が、その当時のホスト校でもあり、学生の受け入れ、そして他大学との連携が実現することとなりました。

また、記憶にも新しい昨年の2016年、熊本地震では、今までのいわてGINGA-NETプロジェクトに参加してきた大学生を中心にチームを組み、被災地支援を行ってきました。

今後の目標としては岩手県、もしくは県だけの地域だけではなくて全国、そして世界にも、このような学生ネットワークを広げていきたいなと思っております。

以上で、発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

○板橋総合司会　　ありがとうございました。

岩手県立大学災害支援ボランティア団体代表の川原直也さんでした。

それでは、続いて宮城県から、女川1000年後のいのちを守る会の鈴木元哉さんと、渡邊滉大さんです。では、よろしくお願いします。

○鈴木元哉さん　　1000年後のいのちを守る会の鈴木元哉です。

○渡邊滉大さん　　同じく1000年後のいのちを守る会の渡邊滉大です。

よろしくお願いします。

○鈴木さん　　まず初めに1つ、皆様に伝えたいことがあります。

私は今、この場に立ち、世界の皆さんに向けて、自分たちの考えや思いを発表するのですが、私は、ただの19歳の青年です。とびきり頭がいいわけでも、顔がいいわけでもありません。

ただ1つ、違いがあるとすれば、東日本大震災で被害を受けた女川町に生まれ育ったということだけです。私たちは、大震災のつらく悲しい出来事から、二度と1人の命も失うことがない町を目指し、活動を始め、6年が経ちました。当初、目標であった活動計画を多くの人のご支援によって、1つ1つ実現することができています。

このように私たちが活動できているのは、私たち一人ひとり、子どもが自分の思いを素直に語り合い、それを親や家族、先生や地域の大人たちが認め合い、励ましてくれたからだと思っています。このような社会が全体に広がればと願いつつ、この活動をすることで、あのときご支援をいただいた日本中、世界中の皆様へ、せめてもの恩返しになると考えています。

それでは「1000年後のいのちを守る」を合言葉に、私たちが取り組んできたことを、そして今後、実現していきたい夢について、ご紹介します。

私たちの町は宮城県東部、三陸復興公園の最南端にあり銀鮭やホヤの生産額は日本一で、水産加工業や観光業が発展し、小さくてもとても活気あふれる町でした。

2011年3月11日、午後2時46分、女川で東日本大震災が起こり、30分後の3時20分から翌方まで襲った津波によって大きな被害を受けました。

女川町は各地で観測された津波の中で、非公式ながらも4.3mという津波の報告があり、約1万人の人口のうち8%以上の尊い人命が失われ、家屋の80%以上が流失しました。

食べるもの、飲むものさえない極限状態の生活が続き、たくさんのつらく悲しい出来事が、私たちの周りで起きました。震災から1か月後の4月12日、私たち67名は女川第一中学校で入学式を行うことができました。

制服は流され、鉛筆やノートを買うことすらできません。

しかし、女川の700名の子どもたちは希望の鉛筆プロジェクトにより、全国、そして世界からのご支援により、生活だけではなく食料までご支援いただきました。

不安だらけだった私たち新入生、家族にとって、改めて人々の温かさを感じる出来事でした。そんな中、初めての社会科の授業の中で、阿部先生は女川が大変なことになった、社会科として何ができるか考えてみようといわれ、私たちは夢中で考えました。

話し合いながら、11月には女川の地理的な特徴を調べ、津波の被害を最小限にする方法を考えました。しかし、大きな地震がきたら、とにかく逃げることにしようとなったときに、逃げようといっても逃げない人がいるという意見も出て、あの過酷な体験をした私たちにしか言えないことを、もう一度話し合おうということになりました。あの震災の中で、大切な命を、先生や家族、町の人など、たくさんの人々が守ってくれました。

今度は私たちが、これから生まれてくる人たちのために何かを伝えよう。

そんな願いで私たちが考え出したのは次の3つの対策なんです。

○渡邊さん　まず、絆を深めるです。

非常時に、みんなで助け合うためには普段から一人ひとりのコミュニケーションを取り合い、絆を結んでおくことが必要だと、避難するときや避難所生活を通じて感じました。

普段から、もっと絆を強くしておけば、避難を呼びかけて亡くなってしまった友達の大切なおじいさんや、避難から遅れてしまった人たちの大切な命を守れたと思います。

次に、高台に避難できる町づくりです。住宅や病院、学校は高台に移転します。しかし、漁師の方々や加工場の人たちは海沿いで働くことになります。そこで、夜でも観光客にもわかるように太陽光パネルを活用した避難誘導灯と、高台への避難路をしっかりと整備します。

最後に何より大切であり、私たちが、ぜひ実現したいと願っているのは東日本大震災のことを記録に残すことです。授業で、さまざまな資料を調べましたが、今回の津波の記録が私たちの体験したことと違っていることに気づきました。それらの記録だけが残ったのでは、また、この大惨事が繰り返されてしまいます。そこで女川町内全ての浜の津波がきた最高到達地点に石碑を建てます。そして、各浜から石碑までの誘導灯を設置し、夜でも初めて訪れた人でもわかるようにします。また、石碑の周りには3日分の食料や水を備蓄しておき、毎年3月11日、全員で避難訓練をして、震災のことを私たちが子どもや孫に代々語り継いでいくのです。そうすれば、昔、おじいさんやおばあさんが、囲炉裏端で津波のことを語り継ぎ、この三陸海岸で2000年以上も暮らしてきたように、これからも豊かな生活を私たちの手で作り上げていきたいと思います。

私たちは修学旅行などで女川町にある21の浜全てに石碑を建てるための1000万円を全国、そして海外の方にもご支援いただき、100円募金で集めることができました。

高校生になってからは自分たちの体験をもとに津波から、命を守るすべをまとめた「女川のいのちの教科書」作りのため、100回以上も集まり、活動を続けました。

それぞれが別の高校での生活をする中で、全員が集まることは、とても難しいことでした。しかし、私たちの「1000年後のいのちを守る」活動は、まだまだ始まったばかりです。今年の8月で16の石碑を建立することができましたが、絆を深める町づくりや、今はまだ完成とはいえない中学生版、「女川のいのちの教科書」、その先に小学生版の編集をし、日本各地の小中学生に届けたり、英語化して、アジアの子どもたちに届けたりすることなど、まだまだやることは山積みです。

ここでACジャパンさんが私たちの活動をCMにしてくれたのでご紹介します。

○女子生徒　悲しみを繰り返したくない。

○男子学生 1000年後のいのちを守る。

○ナレーション 女川町いのちの石碑は中学生たちの故郷への強い思いから生まれました。津波到達地点より上に石碑を建て、1000年後の命を守ること。

その取り組みは「いのちの教科書」作りにも引き継がれています。

語り継ごう、防災のこころ。ACジャパン。

○渡邊さん 私たちの詳しい活動は、お手持ちのパンフレットに記載してあるので、ご覧ください。

「夢だけは 壊せなかった 大震災」。これは同級生が震災直後の6月に詠んだ俳句です。3つの対策案は、まだ夢の段階です。しかし、あの日、夢を実現させる唯一の源である大切な命を守っていただきました。世界中の多くの人々の支えによって、今ここにいることができる1人の人間として、これから生まれてくる全ての命の幸せのためにも、ぜひ夢を実現させたいと私たちは願っています。これまで私たちは自分たちの考えたことをお伝えする貴重な機会をいただきました。

合言葉は「1000年後のいのちを守るために」。

私たちは、つらく悲しい出来事を経験しました。この対策案は難しいことではありません。ただ、震災で亡くなった命への畏敬の念と、これから生まれてくる命と向き合ったことでできました。私たちの活動が何かを始めるきっかけの1つになれば、うれしいです。

そして先生は今、先生ではない。むしろ生徒である。学ばせられることがたくさんあると最近よくおっしゃいます。私たちも先生と同じく、私たちもこの活動を伝え、また、この活動を伝えるだけでなく、いつか今度は私たちが、皆さんから何かを学ばせていただければいいなと思います。

最後になりましたが、これまでのご支援に感謝するとともに、私たち一人ひとりが、よりよい未来のために少しでも貢献していくことを誓いながら、いのちを守る会の発表を終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

○板橋総合司会 ありがとうございました。女川1000年後のいのちを守る会のお二人でした。ありがとうございました。

それでは、続いて、福島県立福島高校スーパーサイエンス部、放射線班の見城花菜子さんと菅野翼さん、よろしくお願いします。

○菅野翼さん 本日は、このような発表の機会をいただき、ありがとうございます。福島県立福島高校2年の菅野翼です。

○見城花菜子さん 1年の見城花菜子です。

○菅野さん 本日は福島高校放射線班の活動について、ご紹介させていただきます。

2011年3月11日、14時46分、東日本大震災が発生しました。

このとき、学校では授業中でしたが、校舎外に避難し、それ以後、校舎内は立ち入り禁止となりました。

その2日後、学校の体育館は原発周辺地域の方々の避難所として使用されました。

2011年5月、スーパーサイエンス部の生徒によって校地内の線量測定がされ、マップが作成されました。これを機に部内に放射線班が結成されました。

2014年以降は低線量外部被ばくについての調査をするために、福島県内外の高校生の個人線量調査を行ってきました。その結果、福島県内の高校生の個人線量は、福島県外の高校生のものと大きな差がないということがわかりました。

こちらが、その結果を表したグラフになります。グラフの横軸は学校名を表していて、向かって左側から福島県外、県内、国外の高校を表しています。そして縦軸は1年間あたりの被ばく量を表していて、四角い部分が、その線量の分布を表しています。

ご覧いただいているグラフからわかるように、福島県内の高校生の個人線量は、事故による放射線の影響を含んでも福島県外、国外の高校生の個人線量と大きな差がないということがわかります。この論文は、東京大学、早野龍五先生のご支援のもと、「ジャーナル・オブ・レディオロジカル・プロテクション」という科学雑誌に投稿されました。

2013年、フランスの先生が福島高校に来校され、それからフランスの高校生との交流が始まりました。2014年からは毎年春に、フランスで行われる発表会に福島高校生徒が参加することになりました。2015年からは毎年夏にフランスの高校生が福島にやってきて、放射線防護ということを中心に福島の現状を学ぶワークショップを開催しています。

○見城さん　そして、今年からは都立戸山高校も加わり小高町東部仮置場、浪江町の見学と、裏磐梯や会津などの観光地の現状、風評に立ち向かう農家の見学、そして、避難帰還や風評について生徒同士で討論を行いました。動画がありますので、ご覧ください。

今年が一番の盛り上がりは討論でした。

時間の都合上、詳細はご説明できませんが、やや線量の高い故郷への帰還をどう考えるかや風評払拭の方法について県外、フランスの生徒と、討論できたことはよい研修になりました。

そして、今までの活動を通して、福島県外や海外の福島に対するイメージは、事故直後のままで、福島イコール原発事故汚染地域であることや、風評や、避難・帰還をめぐる社会的問題の背後には、放射線量や福島の現状への誤解があることがわかりました。

そして、これからは、より多くの地域の協力を得ながら、個人線量、空間線量を調査し、福島の放射線量についてわかりやすく伝え、理解を促していきたいと思っています。

そして、解決済みの課題は何か、未解決の課題は何かなど、福島の現状を伝えていく必要があると思っています。これで発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

○板橋総合司会　ありがとうございました。

福島高校スーパーサイエンス部放射線班のお二人でした。ありがとうございました。

ここまで東日本大震災、被災3県の若い世代のすばらしい取り組みをご紹介いただきました。続

いては、その若い世代に向けた地域密着型の防災活動を、ご紹介いただきます。
大阪市立大学都市防災教育研究センター研究員の吉田大介さんです。
よろしくお願いします。

○吉田大介研究員 皆さん、こんにちは。大阪市立大学の吉田と申します。

私からは「スマート端末アプリの活用を通じた地域防災」についてお話させていただきます。これまで発表された皆さんは、災害を身近に感じている方々の発表でしたが、我々の大学がある大阪の子どもたちは、阪神大震災から20年以上経過していますので、災害を身近に感じられない、そういう子どもたちを対象に、災害を身近に感じてもらうためのアプリをご紹介させていただきますと思います。まず、このアプリをどのような場で活用しているかといいますと、本学の防災センターでは、コミュニティ防災教室という取り組みを展開しております。地域と協働して作り上げる防災教育プログラムが特徴です。その1つの目玉として、アクティブラーニング型の災害訓練を行っております。この訓練は、地域の子どもたちがターゲットになりますが、学校の中で実施する従来型の訓練ではなく、学校の周りのエリアが訓練地域となります。特徴の1つとしましては、子どもたちにとってはシナリオのない訓練で、何が起こるか分からないような訓練となっております。

例えば、この写真のように突然、街に怪我人が現れて、子どもたちになんとか対応してもらったり、地域の消防団に協力して頂き、土のう作り体験や、消防署では初期消火の体験など、現場で体験してもらうプログラムを組み込んだ訓練となっております。

この訓練では、地域のさまざまなコミュニティの方々にご協力をいただいて実施している訓練で、シナリオがなく、状況がリアルタイムに変化していく様子を作り出すために、先ほど申し上げたアプリなどのICTを使って訓練を進めていきます。

実際に災害を起こすことはできませんので、このアプリでは、災害に遭ったような感じをイメージしてもらう仕掛けを、いくつか組み込んでおります。例えば、火災のエリアに入ると、警告音（サイレン）が鳴り、画面の色が赤く変化します。道路が通れなくなっているところは黄色、浸水の場合は青色というように視覚的なイメージと、音により災害を感じてもらう仕掛けをアプリに実装しております。

基本的には、このアプリは地図アプリとなっております。もう1つの特徴としましては、災害状況が変化していきますので、自分がいる周辺で、どんな災害が起きているかということが、この地図機能でわかるようになっております。このアプリは時間の経過とともに、例えば、赤い円は火災範囲を表しているのですが、時間の経過とともに、この火災のエリアが広がっていくような状況を作り出すことができます。黄色は道路が通れなくなっている状況になります。

子どもたちがタブレット端末を持って、どのように避難したら安全に避難所まで避難できるかということを、自分たちでその現場で考えて、行動に移してもらうようなことを、体験してもらうアプリになっています。

こちらは昨年度、ちょうど1年前ぐらいの時期に、大阪の堺市御池台という地域で、このアプリを使って訓練した事例となっております。

このときは小学生5年生約90名に対して、このアプリを活用しました。対象が小学生だった

ので、体験学習的な要素を強めた防災訓練となり、私たち教員がこのようにタブレット端末を持って、子どもたちを引率しました。

この訓練では、地域の自治会の方々にご協力いただき、防災倉庫やマンホールトイレなど、地域に設けられている防災関連施設の説明をおこなって頂きました。日ごろの防災訓練等で練習している成果を、このような場で活用して頂きました。また、訓練中には、街のところどころでタブレット端末をかざして、どの辺が危ないのかとか、AEDがどこにあるか知ってる？など、そのような話を子どもたちにしながら、まち歩きをしています。途中で仮想的な災害を設定し、赤が火災ですね。こちらが土砂崩れとなっております。災害を現場で感じてもらいました。

このような災害情報を、地域の方々や堺市危機管理室と一緒にまち歩きや対話をして、みんなで作り上げた、子どもたちのために作り上げた訓練を実施しました。

実は、我々も想定してなかったのですが、この5年生たちが、今6年生になっているのですが、来週火曜日に、この6年生たちが5年生に対して、同じような訓練を実施してくださるそうです。そのときも同じように、地域の方々が防災倉庫の説明や、マンホールトイレの設営などを一緒に訓練をおこなうそうで、私たちの関わった取り組みが、地域に根付き始めており、とても嬉しく感じています。

最後に、まとめのスライドです。全てを解決できるアプリやシステムはないと思います。私たちも、このアプリ開発に関わりましたが、その地域ごとに状況は異なりますので、今回のように、地域と一緒に問題を考え、地域に合う仕組みをアプリに組み込み、進化させていけたらと思っています。

そのために、今回ご紹介しましたアプリをオープンソースとして公開し、無償で使えるだけではなく、カスタマイズして、様々な地域でその地域に合うような形で活用してもらえればと思います。このアプリは、ただ使ってもらうだけではなく、データの準備などを通じて、ICTに強い若い世代と、地域の状況をよく知っている高齢者とを、つなぐきっかけにしてもらえればと考えています。更に言うと、子どもたちが関わってくださることで、大人たち、若い親御さんたちが地域に関わってくれることを期待しています。このアプリは、楽しく使えるアプリですので、楽しく地域に関わっていただいて、そのことによって、地域全体の防災・減災力向上につながるのではないかとということで、私の発表をまとめさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○板橋総合司会 吉田先生、ありがとうございました。

新しい形の地域防災の取り組みをご紹介いただきました。

さて、ここです、本日は特別ゲストとして、高知県黒潮町から、大西勝也町長にもお越しいただいておりますのでご紹介いたします。大西町長、ご登壇いただけますでしょうか。

2012年、南海トラフの巨大地震モデル検討会が、黒潮町での最大津波推計値3.4mという衝撃的な想定を発表しました。

黒潮町は、それ以降、その厳しい状況をいわば逆手にとって、独自の先進的な防災を進めてられています。本日は、その黒潮町の取り組みをご紹介いただきたいと思います。

では大西町長、よろしく願いいたします。

○大西勝也 高知県黒潮町長

ご紹介いただきました、高知県黒潮町というところからまいりました、大西と申します。本日は、このような場で貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございます。

本来でございましたら自分が壇上に上がってお話をさせていただくということではなくて、実際に東日本を経験された東北の皆様にご教を乞わなければならない立場の者でございます。どれほど皆様にご貢献できるのかわかりませんが、これまでの黒潮町の取り組みと、また実際に防災を進めてきて思ったことを述べさせていただければなと思っております。少し、東北地方では、東日本、実際に起こってしまった事象がありまして、少し関心が薄かったかなと思ひ、相対的に関心が薄かったのかもわかりませんが、実は東日本大震災のちょうど1年後ぐらいに有識者会議から、いわゆる新想定というのが公表されました。その際、黒潮町に示された数字は提示させていただいております3つでございます、最大震度7、そして黒潮町の沿岸のどこかのポイントで最大3.4mの津波高と。

これは遡上高ではございませんで、ポイントでの波高でございます。

そして、これは高知県沿岸でございますので黒潮町とは限らないんですけども、この当時、高知県の沿岸、長い沿岸線のどこかに1mの津波到達まで最短2分と。この3つの数字だけが有識者会議から公表されまして、そうなる、こういうことになるわけです。これ、翌日の全国紙、そして地方紙、地元紙の記事ですけれども。

ビックリするようなネガティブな情報がバーっと舞いまして。

当時、振り返ってみますと、本当にメディアというメディアから取材が殺到いたしまして、日常業務すらままならないと、そういったような状況でございました。

住民の皆さんにおかれましては、大変なご不安と、そして混乱の中で、時間を過ごさなければならぬと、こういったフェーズであったかなと思ひます。

今、振り返ってみまして、本心から、そう思われていたのか、どうかは検証が必要でございますけれども、厳然たる事実として客観的に振り返ってみたいと思ひます。

まず、諦めた、そして逃げないということを、言葉として実際に発せられて、意思表示をされる住民の皆さんが多数おられたというのは事実です。

つまり、自分たちの防災というのは本来、BCPの考え方であります。平時のライン、ここから防災をスタートしようということではなくて、ある意味、新想定によって、ドンと災害に近い事象が起こってしまつて、防災のスタートラインにつかなければならぬというところからスタートしなければならないというのが黒潮町がスタートした本格防災のキックオフでございます。これは、新想定を受けたのが3月31日、4月1日は日曜日でございます、4月2日に全職員が新年度、初登庁するわけですけれども、全職員を集めて訓示をした内容です。

赤字で書いてるところが伝えたかったところなんですけれども、どうしようもないと対策を諦めたり、生活ができる町でない、これまでや、これまでの町の営みを否定するような考え、また、その発言を一切禁止すると。

今後の発言は、しっかりと前向きなものにしたいということです。つまり、避難行動、ひい

ていえば命、そして、これまでの町。こういったものを否定するような発言は許しませんよと、こういったことです。

これは、このぐらいのことを言わなければ、統率が取れない。

それだけの混乱と不安の中で黒潮町の防災はスタートしなければならなかったと、これが現状でございます。黒潮町が、この5年半、進めてまいりました本格防災の推進エンジンについて、少しご紹介をさせていただきます。

黒潮町は皆さんのご地元もそうだと思うんですけども、消防団が非常に頑張っていたいていまして、黒潮町には約200人の職員がおります。これ、保母さん、公務員さん含めてですけども。その200人の職員は防災セクションに配属されているいなくかかわらず、黒潮町を所管する14の分団、どこかの分団に、まず一義的に配置をされます。そして、その分団が、それぞれ単独地区、あるいは多い地区でいいますと12地区を所管される分団があるんですけども、更にどこかの地区に配置されて、いわゆる地区とコミュニケーションを図るその枠組みを黒潮町は持っています。防災のための地域担当制といまして、簡単に言いますと200人の職員全員が、どこかの地区で防災担当をやっていると、こういった枠組みでございます。

その枠組みを使いまして、まず最初にトライしたのは、今回の新想定に対応するためのハード、防災インフラの評価でございます。

各地区で皆さんお話し合いいただきながら、実際に町歩きをしながら、この当地区では今回の想定に対応するだけの防災インフラが整っているのかどうなのか。避難道は、今の避難道で十分足りるのか、足りないのであれば、どこに整備するのか。そういったことを集中的にワークショップをやって整備計画を組みました。

新想定が出て4か月で、この整備計画を住民の皆さんと一緒に組みまして、今現在、整備を進めているところでございますけれども、避難タワー6基、それから避難場所が160か所、避難道については250か所が来年度を持ちまして、ほぼ整備が完了すると、こういったところまでやってまいりました。

ただし、これはハードのキックオフでございまして、実際にそうなのかと、リアリティーを持って実際にそうなのかと、実際にハードの計画をマップにプロットしまして、評価をしました。そうするとマップ上では、避難道のすぐそばのお宅の命は助かると、確保できるという判断になります。ただし、それはマップ上の判断であって、本当にそうなのか。

こういうことです。つまり、例えば歩行に障害をお持ちの方がお住まいになっておられるのではないか、あるいは視覚的に、あるいは、乳幼児を抱えられた若い奥さんが。そういったさまざまな属性があるわけございまして、実際に、それを全て調査してみようということで、61地区は463の班で構成されています。

これ、皆さんの自治体でも、構成範囲としては最小の単位でも班というのがあると思うんですけども。大体10軒とか15軒、こういった単位でございます。このうちの283班が浸水するとされる班でございまして、3791世帯。これを10軒とか15軒の枠組みの単位でワークショップをずっと進めてきたと。

で、何をやってきたかというのは、ここにご紹介させていただいております。

これ、個別避難カルテといえますけれども、さまざまなご家庭の諸事情を1回整理してみようと

ということです。特段、特筆すべきものがあるわけではございませんけれども、この取り組みを進めてきたころ、大体ワークショップが300回目、400回目ぐらいに突入したころだと思いますけれども。

冒頭、申し上げたような諦めの声というのが非常に圧倒的に減ってきました。

これ、土佐人というのはですね、もともと、台風銀座って呼ばれていまして、台風がドンとくると、でかい波がドンとくるわけですね。大体、豪気な県民性を持っていまして大体一升瓶を持って、がーっと浜辺に行って、杯、酌み交わしながら、今の波はでかかったなどかって、お酒を酌み交わすような文化を持っているんです。

なので、34mといわれたときも、逃げないっていったら何か豪快で豪気で、どうだ格好いいだろうといったような風土があったのは間違いありません。それが全てとは申しませんが。

ただし、全町的にビックリするような回数のワークショップを重ね、おじいちゃん、おばあちゃんが本気になって、真剣になって取り組む姿が全町的に蔓延したころ、もはや、そういう発言をすることが許されないような町の雰囲気になっていました。

したがって、僕はこの避難カルテを作った効果、さまざまあるんですけども、本日ご紹介できないのが非常に心苦しいんですが、さまざまな効果があるんですけども、一番の効果は、やっぱ町全体の雰囲気を醸成、作り変えてきた、これが一番大きな効果ではなかったかなと思います。これが、黒潮町の進めてきた防災の最大の特性じゃないかと思っておりますが、下辺横軸が時間軸となっております、一番左端は新想定の日から先月までの防災活動履歴を取りまとめたものです。

これは、行政主体で行政が把握している分の回数でございますので、住民主体で地域が独自にやられているものは、これ加味していないので実際の防災活動履歴というのは、これをはるかに上回る数字であると自負をいたしております。

ご参加いただいた参加者数というところをご注目いただきたいんですけども6万人。

これ、うちの総人口の約5. 数倍ということになります。

5年半で5. 数倍の参加者数ということなので1年に直すと、全住民が1回、何かの防災活動に参加したと、こういうことになります。これ、悉皆性を最大値にとったときです。

ただし、これを見ると、ああ、黒潮町、すごい頑張っているねとただけだと思うんです。自分も客観的に振り返ったときに、ようやくきたなと思いますけれども、先ほど申し上げましたように悉皆性を最大値でとりますと、せいぜい1人が1回、年間参加したということです。もちろん、参加率には偏在がございますので、自主防災会の会長さんみたいに年間10回も15回も参加される方もいれば、自分たちの世代のような、なんとなく体力的にも自信があって、逃げられるだろうと思っている一番アプローチのしにくい世代、全然参加のない世代ですね、こういったものもありますけれども、悉皆性を最大値にとると、せいぜい1回です。

なので、これを5年半進めてきて、自分たちが実感しているのは行政指導の防災の限界と、それから防災を防災単独で進めていくことの限界、こういうことです。

こちらは本当はお時間があつたら一番説明したいところなんですけれども、本日はお時間がございませんで、少し前に進ませさせていただきたいと思っております。

先ほど申し上げましたように、新想定、最大震度7がドーンと揺れて、34mのやつが2分で

きますよ。そのぐらいの感覚を住民の皆さんはお持ちになられました。

そしてもう1つ、情報としてはお与えいただけなかったんですけども、もう1つの感情が生まれました。それは、明日にでもくるんじゃないかということです。

したがって、明日にでも最大震度7がきて、34mが2分でくる。そういったことが総合的に感情を巻き起こしたんでしょうか。それが諦めにつながったんじゃないかなと思っておりま

すけれども。これ、黒潮町にお住まいの秋澤香代子さんという少し足腰の弱い高齢の方が詠まれた句です。よく紹介させていただくんですけども、大津波という題で1つの句を詠まれました。2012年、新想定が公表された直後の句です。

「大津波 来たらば共に 死んでやる 今日も息が言う 足萎え吾に」。

足腰の悪いお母さんに対してですね、お母さんはやっぱり不安で毎日お過ごしになられてるんでしょうね。それに、同居されている息子さんが大丈夫や、かあちゃんと、きたら一緒に死んだらわいと。結果、これしか言うことができなかつたってことではないでしょうか。

本当に、このときの秋澤香代子さん、そしてその息子さんのご心中お察しすると、本当に胸が締め付けられるような思いです。以降、ずっと黒潮町、防災、一生懸命やってまいりまして、この香代子さんがもう1つの句を、数年後に詠んでいただきました。2014年の句でございます。

「この命 落しはせぬと 足萎えの 我は行きたり 避難訓練」。

自分たちにとっては最大の褒め言葉です。

自分たちは、これを本当に大切に大切に思いながら、全ての住民の皆さんがこうなったといえるまでの段階にはきておりませんが、少なくとも、こういう方がおられるというのは、厳然たる事実でございます。ただし、美談ばかり申し上げるわけにもいきませんので。

例えば、この2012年のこの句を詠まれたときの秋澤香代子さんが見ていた防災の姿と、自分たちがやろうとしている防災の姿というのは本当に同じところを見ていたのかどうか。あるいは現段階でも、どうか。これをまず、自分たちが本当に考えなければならないと思っています。

もう1つ、事例を後ほど、ご紹介させていただきたいと思っておりますので、その場で、また触れたいと思います。自分たちが、いろいろやってきたことは、振り返れば、大体こんなことかなと思ってるんですけども。一番お伝えしたいのは、下段です。

これも、下辺横軸が時間軸になってまして、縦が資源の投入量と、こういうことになります。つまり、この時点がですね、新想定公表だとすると、あまりにも衝撃的な数値であったために、行政が主体性と主導権を持って走る以外にございませんでした。

本来の防災の在り方として、例えば自主性、自発性でありますとか地域独自のとか、あるいは個人のとかっていうことを、今、目指していますけれども、当時のスタート時点で、それができるほど、生ぬるいような想定ではなかったということです。しかしながら、そのまま行政が主体性を持って、主導権を持ってやっていく防災では限界があると思っています。これについても一番最後に触れたいと思います。

したがって、いかに住民の主体性がメインになる、住民の主体性の防災にスライドしていくか、これが肝です。

台風一発で5000人が死んでおった時代がありました。それからすると、後に災害対策基本法が、しっかりと法律として制定され、そこにきちんと書かれました、国の責務、あるいは都道府県、市町村の責務。これを果たしてきて、圧倒的な自然死の、災害死のオーダーががっと、100人単位、100人未満ぐらいまで圧縮されてきたと。これは、我が国が防災先進国であるということのゆえんであると思っていますし、高く評価すべきだと思っています。

ただし、この方向性の延長線上に犠牲者ゼロは到底、到達できないだろうなというふうに思っています。つまり、ある一定の自然死、あるいは災害死を許容するという前提のもとでしか、今の国の枠組みの中では目標値の設定ができない、こういったことになるんじゃないかなと思っています。黒潮町の一番最初に掲げました目標は、諦めないです。つまり、諦められる方がたくさんおられた。2番目に掲げた目標は犠牲者ゼロです。この、犠牲者ゼロ、つまり災害死を許容しない。そのためには、住民の主体性の防災にシフトチェンジしていくしかない。これは、大きな挑戦でございまして、どこにも先進事例がございません。したがって、自分たちの力でやっていくしかない、ということでございます。

昨年、世界津波の日、高校生サミット in 黒潮というのをやらせていただきました。皆さんと同じ同世代の方が世界30か国361人の高校生にお集まりいただいてフィールドワークや分科会、そして会議と進めていただきました。本当に、この子たちがこの世代が次の世界の防災を担っていくんだと本当に実感いたしました。今日も発表を聞いていて、本当に同じ思いをしたところです。

紹介をさせていただきたいのは、その総会で採択された宣言です。

これ、全文と、それから3つの指針、そして、それに伴う、それぞれの行動指針が書かれているわけですが、最後、こうくくられています。

自然の恵みを享受し、時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然とともに生きていきます。

今日のご発表も、まさにそのとおりだったと思います。

この高校生サミットにご参加いただいた、あのインド洋大津波でビックリするような犠牲を出したアチェ州、そこの公立第一高校からムハンマド・ハイラル・ラジ君という方が来られていました。その方は、お父さん、お母さんとご兄弟を、あの津波によって犠牲にされた。

そういった子が参加していただいたサミットの宣言文、採択いただいた、そのラジ君にもコンセンサスをいただいた、この宣言文が「自然を愛し、自然とともに生きていきます」です。

自分たちが見ている自然と、ラジ君が見ている自然は、どう違うんだろうか。そして自分たちが目指そうとしている防災と、ラジ君が目指そうとしている防災は、本当に同じ方向を向いているんだろうか。そういったことを常に不安に思います。

したがって黒潮町の防災は、会があるわけでもなんでもなくて、最近、外部から評価いただくようになりましたが、できることから1つずつ積み上げてきたというのが黒潮町の防災ではないかなと思っています。

したがって、まだまだ防災途上でございまして、特に黒潮町の一番最初に掲げた、諦めない、なんとなく諦めないは達成できたと思っています。

これから犠牲者ゼロへ挑戦していきます。

しかしながら先ほど申し上げましたように、防災単独の枠組みでは継続性がございません。従いまして、いかに文化として醸成していくのか。

その先に、黒潮町の防災の3つ目の目標、防災を進めることで、豊かな地域社会を作り上げ、そして、その地域社会でお暮らしの方が幸せを感じられる。これが黒潮町の最終的な防災の目標であると思っています。

そのためには、まだまだ被災地の皆さん、そして本日、ご会場にいられた有識者の皆様にさまざまなご指導を給わなければなりません。

したがって本日、壇上から偉そうなことを申し上げましたが、本日は勉強させていただこうと思って、この場にまいった次第です。これ終わりましたも、日曜日まで、この会場にうろちょろしておりますので、もし、お構いの方がおられましたら、お声がけいただければ幸いです。

少しお時間押しまして、申し訳ございませんでした。僕からの発表は終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○板橋総合司会 ありがとうございました。

本日の特別ゲスト、大西町長からのお話でございました。

では、大西町長にも加わっていただきまして、限られた時間ではございますが、皆さんでディスカッションをしていきたいと思えます。

今回、コメンテーターをお務めいただくお二方、まずは、大阪市立大学都市防災教育研究センターの所長をお務めの森先生なのですが、ということは、あの吉田先生の上司にあたる方ですね。このセンターが震災後に立ち上がったと伺っておりますので、その辺も少しお話しいただきながら今日の発表を聞いてのご感想などを伺えればと思えます。

○森一彦教授 今日はですね、お招きいただきまして、どうも、ありがとうございました。

今日、大阪から仙台まで新幹線を乗り継ぎまできました。約5時間の距離になります。

私どもは、6年前の東日本大震災で、被災をしてないと思われがちですけど、実は被災しております。ワールドトレードセンターが長周期地震動で大変、壊れました。

当時、橋下府知事があそこに移転するつもりが、その構想が崩れました。様々な影響を受けております。

また、先ほどご紹介いただきました、阪神大震災のときも自分、影響を受けましたけども、これは20年前になります。今では、もう阪神大震災を知らない学生が入学してきています。

先ほど隣の高校生の方と、お話ししましたら、小学校5年生のときに被災されて、今、高校生、もうすぐ大学生になられるということです。今、一生懸命やられている方が、あと数年、10年になると、立派な防災リーダーになられるんじゃないかなと、とても感銘を受けました。そういう意味では「災害から学び、未来へつなぐ」という、この活動は多分まだ一部の限られたところだと思いますが、ぜひ、頑張り方を継続させてやって行くことがとても大切だと思います。

ぜひ大阪にもこの勢いをもち帰っていききたいと思えます。

私どもの防災教育研究センターは東日本大震災以降にですね、研究活動を開始しました。

それで今は、JSTの支援もいただきまして、公立大学のネットワークを作って、防災教室を展

開しております。

東北ですと、岩手県立大学さん。他に首都大学東京、横浜市立大学、名古屋市立大学、大阪府立大学、それから兵庫県立大学が連携しています。先だって熊本でも大震災がありましたので、熊本県大にもお呼びかけをしています。

吉田先生がご紹介いただいたようなコミュニティー防災教室の活動を、今、活発に展開しつつあります。

これによって、公立大学のネットワーク化をすることで、防災教育の様々なデータソースをオープン化するわけです。みんなで共有化して、みんなで作ろうっていう活動を展開しています。これは、みんなで創る、ともに創る、共創っていいです。こういった災害から学んで、未来に続く仕組みとか科学技術をみんなで、こう考えようとしています。

地域ごとにバラバラで違うんだけど、みんなで作ろうということです。

それで、まず初めに地域に最も近い公立大学が連携したら良いというような発想で今始めております。

そんな中で、吉田先生のお話のように、いろいろな活動をやっておりますけども、そのキーポイントが、子どもたちだとわかってきました。

しかし総務省の統計なんかにしますと、実は6割がまだ無関心だというデータがあります。特に若い子が実は無関心だというデータもあります。また、関心はあるんだけど、具体的にどういうアクションをしていいかわからないという人も多い。

NHKで災害に備えてくださいっていうふうに言われるんですけども、じゃあ、具体的にどうすればいいのかというのが、個々、個別に違うので、実はわからない方が多かったりするわけですね。それをちゃんとエンドユーザーにこう届ける。

先ほど黒潮町長さんがやられている住民主体の活動がとても大切で、それを全国に伝える、そういう仕組みが重要だということに思っています。

その中心にお子さんがいるとです。子ども中心にみんな集まってくる。おじいさんも、お母さんも、隣のおじいさんも一生懸命やってくれるという、そういったことになります。

今日の皆さんの活動にはとても感心しました。ぜひ今後とも活躍いただければと思います。質問したいこともありますが、感想は以上です。

○板橋総合司会 ありがとうございました。もうおひと方、災害科学国際研究所の佐藤健先生。防災教育にも、長年関わっておられますが、今日の発表はいかがでしたか？

○佐藤健教授 すばらしい活動とすばらしい発表、本当に感心させていただきました。復興とか防災の問題は、学校の教科書の例題のように、答えが1つあって、見通しがきく、わかりやすい問題設定ではないわけですね。難しい課題に真剣に向き合って、主体的に取り組んでおられ、本当にすばらしいなと思って聞かせていただきました。

会場には多賀城高校の災害科学科の生徒さんもいらっしゃいますし、壇上の高校生や大学生の若い世代の活動を、もっと応援してあげたいという思いを持ちました。

○板橋総合司会　ありがとうございます。

森先生、質問というのは、どういう質問ですか？ぜひ。

○森教授　質問は課題も多いと思うんですけど、まずお聞きしたいのは、こういった防災活動のリーダーシップをどのように次の人につなげて行くかです。

結局、リーダーの方がすごく責任感を持って頑張ってもらってるんですけども、頑張ったことで何か新しい発見だとか、新しい出会いがあって、更に楽しくなって行くと、次につながっていくと思うんです。そういう意味でも、次のリーダーに私はこれをやってよかったよとか、こんな人と出会ったよかったというような、そういう喜びですとか、驚きがあれば、いいかなと思います。まず、なんでもいいですので、エピソードを教えてくださいなと思います。

○板橋総合司会　大槌の黒澤さん、いかがですか？

○黒澤さん　はい、私は、この復興研究会を3年間、やらせていただいています。

定点観測をする際に盛土の上なども歩いたりしましたが、まだ工事をしている地点などもあり、工事をしている方々に協力をいただいたりしました。また、大学生院生の方々にも協力をいただいていた。その人たちと、今後の復興に関する様々な話をして、大槌町が復興する、イメージですか、そういうのが膨らんだなと思いました。

○板橋総合司会　震災が起きる前と後では、自分が今住んでいる大槌という町に対する思いに何か変化はありましたか？

○黒澤さん　はい。最初、震災前は、まだ小さかったというのもあるので、別に自分の町については、はっきり言って何も関心はありませんでした。ただの小さい町とか、そういう思いでしかなかったんですけども、震災を経て、震災で町がなくなって悲しいとは最初は思いましたけれども、復興研究会の活動を通じて改めて町と向き合って、これから、こういう町になって欲しいとか、なんか考えさせられました。

○板橋総合司会　なるほど。発表の中でも、盛り土の上に立ったときに、これから、どんな町になるんだろうってワクワクしたっていう言葉が、すごく印象的だったんですね。

ぜひ、皆さんの考えも反映させた、いい町になっていくといいですね。

福島菅野君は、今年フランスに行かれたんですね。どうですか？今の森先生のご質問は。

○菅野さん　僕はフランスに行かせていただいて、自分自身、福島県内に住んでいる身として、福島県を見てきた形になるんですけど。

やっぱり、フランスとか、そういう県外の外から見た福島というのを、いろいろ意見を聞かせていただいて、福島原発事故以降の福島の状況が外の人から見たら、事故直後のままで止まっているということを知ることができて、すごく自分自身、故郷である福島のために何ができるのか

というのを考えていかなければならないなと感じました。

○板橋総合司会 やっぱり、放射線班に加わる前と後では菅野君自身の考え方とか生き方も変わってきましたか？

○菅野さん そうですね。自分自身、放射線班に入る前は自分自身、知らないことも多くて、すごい、放射線についても、あまりわからない状態だったんですけども、放射線班に入って、いろいろな、放射線について学んで、そういういろいろな方と関わらせていただいて、自分自身、より福島県のためにできることを探したいと感じています。

○板橋総合司会 なるほど。ありがとうございます。

女川の鈴木君、渡邊君、どうですか？今、2人はもう大学1年生ですよ。

まさに中学1年のときの、今日もいらしている阿部先生の社会科の授業で、故郷のために何ができるか考えようというひと言から、皆さんの活動から始まったわけじゃないですか。

それは別々の高校に行って、大学も別々ですけども、今も続けていますよね。

この活動をやってて本当によかったと思ったエピソードなどありますか？

○渡邊さん やっぱり、この活動をしていて、さまざまところに行かせてもらっていて、今、教科書を作ってて。今あるんですけど…。

○板橋総合司会 これですね。

○渡邊さん こちらの教科書で、いろんな場所に回らせてもらって。

やっぱり、自分たちが当たり前になっていることって、周りでは当たり前じゃないっていう部分があって、話が通じないっていか伝え方が、やっぱり、考えなきゃいけないって思う部分がいっぱいあって。その中で、どう、みんなに、この活動を伝えていくかという部分で、たくさん考えさせられて、どんどん成長してきたなと思いました。

○板橋総合司会 例えば、どういうこと？自分たちが当たり前だと思ってることって。

○渡邊さん やっぱり自分たちが震災で体験した出来事は、例えば震災当時、食料がなくて、苦しかったとか、簡単に苦しかったっていうけど、周りにとっては、どう苦しかったの？とか。やっぱり1つの言葉では、通じない部分があって。そういう部分で、いろいろ感じさせられました。

○板橋総合司会 なるほど。鈴木君は、いかがですか？

○鈴木さん 伝え方で、やっぱり、被災地というか震災を受けた地域と震災を受けていない地域でのギャップというのは、多少、感じるどころがあって。

でも、その中で、この活動を続けていった中で、自分で一番の利点というか、よかったなと思う点は、この活動を続けていった中で、地元を好きになれたんですよ。

この震災から、みんな逃げようとか、守ろうとか、そういう人の命を守ろうとかいう議題とか題名に当たったときに、地元が好きになれたし、人が好きになれたし、余計、そういう話し合っていく、自分たちも仲よくなれたし、そういう人の輪の大切さとか温かさとか、それこそ、さっき言った、当たり前学校行ったりとか、家帰ったりとか、そういうことの大切さを、より一層、大切に思えたことが自分にとっての一番大切なことですかね。

○板橋総合司会 なるほど。ありがとうございます。

佐藤先生、本当に故郷を見る目が変わったという。大人もそうなんですけども、彼らは小学校5年生、6年生のときに、あの震災を体験して、自分たちが生まれ育った町に対する思いが随分変わってるようですね。

○佐藤教授 これから災害を受ける地域は、震災の前から、その地域をもっと好きになるようないろんな体験や学びに取り組めば、それが災害を減らすことに実質的につながるという気がしております。

子どものころから、地域の自然や歴史、社会をよく理解することが、防災にとってもとても大事で、それぞれの地域でそういう取り組みが行われるといいかなと思います。

○板橋総合司会 時間も残り少なくなってきましたので、皆さん、すばらしい活動をなさってるんですが、それぞれ、課題も抱えてらっしゃると思うんですね。

せっかく、防災のプロフェッショナルがいらっしゃるの、こういうことはどうやったら解決できるんでしょう？とか、こういうことは、どうしたらいいんだろうとか、何でも質問を。大西町長にでも結構ですし、吉田さんにでも結構ですが、ありませんか？

○倉澤さん 私の所属している大槌高校復興研究会には防災班という活動がありますが、まだできたばかりで、これといった活動がしっかりできていません。6年目の今だからこそできる防災って、どういうものなのかっていうのを教えてほしいです。

○板橋総合司会 なるほど。6年目の今だからこそできる防災。いかがですか？森先生。

○森教授 先ほど文化まで高めるって今村所長が言われましたところがポイントだと思います。大阪でも、そういったとこ、悩んでいまして、実は劇団も作りました。

防災劇団というのを作ってますし、あと、防災教室を作ろうとってます。

これは、学校に行くと理科教室とか音楽教室って普通にあるんですけども、その教室に行くと防災のことしか考えない教室、防災の専門の教室っていうのを作るのがいいと思いますので、そういった学生さんの活動された成果を、例えば、空き教室が出たら、そこの専門の教室に、特別

教室に転用するとか、あと、劇団を立ち上げてもらって、なんかちょっと、川で泳ぐと言ってらっしゃいましたんで、川で、そういったものをやるとか、楽しくつなげる。

○板橋総合司会　そうですね。

あと、川原さんがおっしゃった「持ち帰り」っていう言葉があって、被災地に来て、いろんなことを見て、聞いて、体験して、学んだものを自分たちのところに持ち帰って、そこで広める。それができると、全国的にどんどん防災のムーブメントが広がっていきますよね。

川原さんは、何か課題として思っていることはありますか？

○川原さん　そうですね。先ほども発表で、日常からのネットワークという、つながりを持つということがとても大切と話したんですけど。やっぱり、こういう災害というのは、いつ起きるかわからない。

もしものときのために、つながっておくというのは大切だって、わかるはわかるんですけど。やっぱり、大切なのはわかるけど、なんていうんですかね。つながり続けるというのも全く労力がないわけでもなく、大切なんだけど、まあ、ちょっと、つながるというのも、面倒くさい部分もあるかと思うんですけど。それを、なんていえばいいんですかね。どう…。

○板橋総合司会　つながり続けることの難しさ・・・。

○川原さん　はい。っていうのは、実際に、今、東日本大震災が7年目になるところで、実際に阪神・淡路大震災で被害があった地域で、もし、そのようなヒントがあれば、教えていただきたいなど。

○板橋総合司会　なるほど。どうでしょうかね。

あの、ただ、大学生が延べ1万6000人参加したっておっしゃってましたけども、いまやまさに、SNSですとか、離れていてもつながるツールってたくさんありますよね？それを活用して、つながり続けるっていうのはどうですか？、今やってはいらっしやると思うんですが、それでもやっぱり薄れていきますか？

○川原さん　そうですね。なかなか…。僕たちのやっているボランティアネットワークというのも、どの団体もずっと、災害とか防災だけをやっているわけではなくて、本当に、福祉関係であったりとか、職を通じた活動をされているいろんな団体があって、いろんな団体がありながら、災害時のときに、それぞれの特徴を生かした取り組みが災害時のときにできるということで、つながり合ってるんですけど。

なかなか普段から、全部が全部、防災だけのためにやってる団体でもないんで、それぞれがそれぞれの自助的な活動もあったりする中で、日常的な活動もやりながら、それぞれの団体とも連携を取り合っていくというのが、ちょっとなかなか難しい側面もあったり。

○板橋総合司会 ひよっとすると女川の2人に、そのヒントがあるんじゃないかしら？
女川の2人は、まさにそうやって、いる場所もバラバラになった今も、思いを1つに活動を続けていますよね。その根底にあるものは？

○鈴木さん 根底にあるのは、あれなんですよ。

自分らの団体は必ず、全員参加とかではなくて、自分の学業だったり、スポーツだったり、そういうのを優先しつつ、集まるという枠組みでやってるんですよ。

やっぱり、そういうプレッシャーがかかると足かせになったりとかして余計な重荷を背負ってしまうので、やっぱり、そういう、ちょっとした気持ちを置くという面でも、そういうつながれるっていうか、思いを共有するという点で、多分、自分らは続いているんだと思います。でも、ちょっと1つ聞きたいことがあって。

○板橋総合司会 はい、どうぞ。

○鈴木さん 自分らは、多少なりとも、興味がある。防災に興味がある人でつながったりとか、こういう防災に興味がある皆さんが来てくださったりとか、こういう関連でつながったりすることはできるんですけど、本当に、防災に興味のない人への広め方というのが、すごい割と長い間、やっているんですけど、それがいまいち、いまだにわからなくて。

そういう広め方とか、そういうつなげ方とかっていうのを、もし、あたりとかしたら、教えてもらえたりすると、うれしいですね。

○板橋総合司会 これはもう、大西町長に答えいただくしかないですね。
防災の日常化を日々、図っていらっしゃる。

○大西町長 答えになるかどうか、わからないんですけども、少し、突き詰めて考える必要があるかなと思っています。

例えばですね、今日も自分は防災の形にもものすごい不安を感じる時があると言いましたけども、さっき、ちょっとおっしゃっていただいた、例えば、つながるとのこと。そもそも、つながる必要があるのか。まず、それが、まず一義的な問題だと思いますね。

仮に、そこでつながる必要があるんだろうねとなっても、じゃあ、つながるということを自分たちは本当に理解しているのか。こういうことですね。

追求していかなければ、恐らく、本当にそうなのかという姿勢にはちょっとなれないのかなと。そして、本質的なところをお伝えしようとしないう限り、上辺のことをなんぼ言うたってですね、人の心は動かないと思っていて、例えば、よく防災のシンポジウムとかに参加して、いろんなお話を聞くんですけど。

例えば地域とかですね、例えばコミュニティーとかっていうフレーズがよく出てきます。

この先生は、本当に地域とかコミュニティーのことを理解されているのかな。

地域ってなんだろうっていう定義ってね、いろんなところで違うんですよ、やっぱり。いい面

ばかりではなくて、やっぱり、悪い側面もあるんです。

それらをひっくるめて、包括的に理解をしていないままに簡単にフレーズ的にポンポン、ポンポン出ていくと人の心に響かない。

人の心に響かない話というのはね、来てくれる方が、やっぱり口づてに、皆さんがお一人お一人訪ねて、アプローチしていくわけにはいかないので、お二人の話を聞いて、やっぱり、こういうことだよって口伝えに広まっていただくためには、僕は、きれいな言葉は必要だと思っていなくて本質だと思うんですね。

そのためには、まずお二人がちょっと厳しい意見を言うようなのかもわからないけれども、お二人が本質を追求しようとする姿、それが、僕は多分、一番共感を呼んで、一番アプローチしづらいところにアプローチが可能となるんじゃないかと、そんなふうに思っています。

○板橋総合司会 ありがとうございます。

さあ、あまり時間がなくなってきましたが、今日は多賀城高校の皆さんが会場にいらっしゃいますので、どなたかから、何か、ご質問なりご感想なり、いただけますか？

どうでしょう？きっと思いを共有してくださってるのではないかと思うんですが・・・。

あっ、どうぞ、お願いします。

○石川智也さん 多賀城高校災害科2年の石川智也です。

先ほどディスカッションされて、自分が質問しようとしていたことはほとんど言われたんですが、全体的に、自分がちょっと気になったのが、やはり、人とのつながりという言葉が飛び交ってると思ったのですが、人とのつながりが、災害を、災害・防災という面で、防災という面で、つながっていく面で、人とのつながりが重要だなって思った、感じたエピソードなどがあれば教えてください。

○板橋総合司会 人とのつながりが重要だと感じたエピソード？

○石川さん はい。

○板橋総合司会 はい。どうでしょうか。どなたか。人とのつながり。

どうぞ、お願いします、前川君。

○前川さん 私が震災を経験して、やはり、1人では何もできないということを感じました。私は震災時、避難所にいました。地震の影響で余震が続き、不安で一杯でした。しかし、避難所にいた周りの人や両親などと協力することで、震災を乗り越えることができました。

そのときに、私は人とのつながりが大切なことだと思いました。

町の復興の過程でも、様々な方が協力して進んでいます。私たちがやっている定点観測でも、みんなと協力してやっています。震災や復興についていろいろなことを、記録に残して、それを伝えていくことも、1人ではできなくて、みんなでやっていくことだと、私は思いました。以上で

す。

○板橋総合司会　　ありがとうございました。石川さん、大丈夫ですか？

○石川さん　　ありがとうございます。

○板橋総合司会　　ありがとうございました。

　　ということで、まだまだ続けたいところですが、お時間になってしまいました。

　　小学生だった皆さんが、大人が考える以上に、震災を、ものすごく深いところで受け止めて、今の生き方に反映させ、こういう活動につながっているということを教えていただいて、すごく心強い思いがいたしました。

　　まさに「災害に学び、未来へつなぐ」ということを体現するかのような発表であり、ディスカッションだったと思います。

　　限られた時間でございましたけれども、今日の発表者の皆様、コメンテーターのお二方、そして、大西町長にもう一度、拍手をお願いいたします。

　　皆様、本当にありがとうございました。

大変、興味深いお話の数々でしたね。

　　以上を持ちまして、前日祭の第1部を終了とさせていただきます。

　　このあと休憩を挟みまして、3時半から、第2部、「SENDAI BOSA I文化祭」をスタートしたいと存じます。

　　この時間を活用いたしまして、ホール2階入り口前のホワイエにおきまして、前日祭共催団体でありますJST・科学技術振興機構が進めている事業成果、研究成果の展示、また、同じく協力団体の河北新報社、今できることプロジェクトの活動を紹介したパネル展示を行っておりますので、ぜひ、ご覧くださいませ。

　　また、明日から、本体会議が始まります

　　世界防災フォーラムについての展示も1階にございますので、この休憩時間を活用して、ぜひ足をお運びくださいませ。このあとの第2部は3時半からとなります。

●以上●